

復活 新発田十二斎市



「新発田十二斎市繁栄之図」紀興之著『越後土産初編』元治元年(1864)より(新発田市立図書館蔵)

- と き 10月13日(祝日)午前9時~午後1時
と ころ 新発田市旧寺町地区(中央町2丁目、諏訪町2丁目)
内 容 野菜や特産品などの地場製品の販売、各種パフォーマンスなど
主 催 復活 新発田十二斎市プロジェクト実行委員会
共 催 敬和学園大学 新発田学研究センター、新発田市、新発田商工会議所

問い合わせ先 復活 新発田十二斎市プロジェクト実行委員会
敬和学園大学ボランティアセンター内 TEL.0254-26-3664

復活 新発田十二斎市

物資の交換取引の行われる場所を「市(いち)」といい、その語源は、市では神を祭っていたことから、祭祀を意味する「斎(いつき)」に由来するといわれている。

室町時代には、日本の各地で、農村の畠作と加工業の発達、銅銭の流通などを背景として、月六度開かれる定期市である「六斎市」が開かれるようになった。

江戸時代の越後では、在郷町が発達して、多くの六斎市が開かれるようになった。市日をずらすことによって、生活圏のなかで、場所を変えて、どこかで毎日市が開かれていた。六斎市には品揃えにおいて専門的な商人から、近郷の野菜を作ったり、潟で魚や植物をとったりする農民までやってきた。各地から物資が集まることにより町が繁栄した。

新発田藩の流通経済政策により、新発田城下で開設された定期市は「六斎市」の倍の日数にあたる「十二斎市」であった。たとえば正徳2年(1712)の「越後國蒲原郡小戸村差出帳」には、ひと月のうち、二・四・七・九の付く日に計12回の市が開催されていたことが記されている。享保年間(1716~1736)頃の城下記録である「御所納之外在々より納並覚書」には一日あたりの人出が、通常は2千人、盆前には1万人で、平均3千人の賑わいであると書いてある。

江戸時代の新発田を訪れた文人たちも市の繁栄に目を見張っている。文化11年(1814)に訪れた十返舎一九は『諸国道中金の草鞋』で「殊更市の立つ日は、近郷に稀なる賑はひにて遠近の人ここに群集する」と記し、吉田松陰は『東北遊日記』嘉永5年(1852)2月9日の条に「今日は会々其の日に当り、民庶雑沓し、貨物粗ば備はる」と記している。元治元年(1864)に紀興之の著した『越後土産初編』には越後の六斎市の地名と日が紹介されているが、とりわけ「新発田十二斎市繁栄之図」として描かれている。

市の立つ日をイチビといい、その間の市が休みの日をマビといった。イチビごとに、市の立つ町内が変わってゆく方式をとっていた。新発田市立図書館の新発田藩政史料にある法令には、藩が市を開設するにあたり、市場の秩序の維持を図っていることがわかる。藩の取り決めた秩序のもとに市が開かれていた。

十二斎市はやがて隔日の偶数日をイチビとする「十五斎市」になった。大正12年頃の毎月のイチビと場所の記録が『新発田市史資料第五巻民俗(上)』に収められている。その後、交通事情から、オオマチ(上町・中町・下町)に市を立てることが困難となり、三ノ町と四ノ町だけとなった。昭和40年代に両町の一部と三ノ町の一部に「一・六の市」が立つようになったが、これも平成20年3月をもって最後の出店者が止めることになった。

市がけは、生産物の販売による現金収入を得るものであり、その収入で足りないものを購入することができた。もう一つ見逃すことが出来ないことは、交易の場のみならず、お互いの親交を温めたり、情報の交換ができる楽しみの場になっていたことである。現代感覚でみるとコンパクトシティの中核であり、食育の原点であった。

平成20年10月13日、新発田の「市」の伝統のうえに敬和学園大学の「復活 新発田十二斎市」が出店と芸能披露により一步を踏み出す。 (鈴木秋彦 記)